報告

GCASサブゼミ2018-2020活動報告

Report on Sub-Seminar 2018-2020

大木 悠佑、清水 ふさ子、川田 恭子、山永 尚美、中村 友美
Yusuke Ohki, Fusako Shimizu, Kyoko Kawata, Naomi Yamanaga, Tomomi Nakamura

1. はじめに

――アーカイブズ学の論文を執筆する、あるいは、変わりゆく社会状況に対応しながら、専門的な理論体系に基づいて実務を行なうためには、博士前期課程の２年間だけでなく、継続的に学び続ける必要がある――

アーカイブズ学専攻（以下、本専攻）で学び、研究に携わるもの、実務の場に身をおくものなど、本専攻に関わる多くのものがこうした想いを抱くのではないだろうか。

本稿は、2018年５月から継続している自主的な勉強会（サブゼミ）の報告である。本専攻には、これまでにも在籍する院生による自主的な学習の場は存在し、その活動の一部は、これまでの『GCAS Report』にも報告されてきた[1)]。このサブゼミは、こうした先人たちの活動に学びつつ、冒頭に掲出した問題意識から、博士後期課程の在学生を中心としながら、修了生などを巻き込みつつ活動している。

サブゼミは、2020年８月までに28回を数えた。この間、どのような文献を読み、この活動を通じて私たちがなにに取り組んできたのか紹介していきたい。

2. サブゼミのはじまりと展開

2018年５月、博士後期課程在籍者４名（大木、清水、川田、山永）により、サブゼミがスタートした。そこから約２年半の間に表に示す文献を講読してきた。

最初期は、アーカイブズ学の最も基本的な考え方である「出所」と「原秩序」に関連する４本の文献を通して、その理論的な展開を理解しようと試みた。その後も、「アプレイザル（評価選別）」、「編成記述」とそれに関わる「検索手段」や「アウトリーチ」などに関連する文献を順次講読していった。

この間、修了生や博士前期課程の院生なども加わるようになり、現在は15人ほどが参加

1――大木悠佑＋齋藤歩＋雫石忠宏＋澁谷梨穂「*Keeping Archives*を読む―GCASサブ・ゼミナール2011活動報告」『GCAS Report』vol.1、橋本陽「2012-2013年度 自主ゼミ活動報告」『GCAS Report』vol.3参照

表――サブゼミ活動内容一覧（2018年５月-2020年８月）

回数	開催日	担当者	報告テーマ・文献	トピック
○2018年度				
1	2018年 ６月２日［土］	大木悠佑	Peter Horsman, 'The Last Dance of the Phoenix, or The De-discovery of the Archival Fonds,' *Archivaria*, No.54, 2002, pp.1-23.	出所・原秩序
2	2018年 ７月21日［土］	川田恭子	Terry Cook, 'The Concept of the Archival Fonds in the Post-Custodial Era：Theory, Problems and Solutions,' *Archivaria*, No.35, 1993, pp.24-37.	出所・原秩序
3	2018年 ８月25日［土］	山永尚美	Jennifer Meehan, 'Rethinking Original Order and Personal Records,' *Archivaria*, No.70, 2010, pp.27-44.	出所・原秩序
4	2018年 ９月15日［土］	―	後期サブゼミ相談会	
5	2018年 10月８日［月］	亀野彩	安藤正人「記録評価選別論の現在」、『記録史料学と現代』、吉川弘文館、1998年、228-262頁.	アプレイザル
		―	ゼミ発表意見交換会	
6	2018年 10月13日［土］	―	ゼミ発表意見交換会	
7	2018年 11月23日［土］	川田恭子	Terry Cook, 'Mind over Matter：Towards a New Theory of Archival Appraisal,' *The Archival imagination: essays in honour of Hugh A. Taylor*, Association of Canadian Archivists, 1992, pp.38-70.	アプレイザル
8	2019年 １月12日［土］	清水ふさ子	Jinfang Niu, 'Original order in the digital world,' *Archives and Manuscripts*, No.43, No.1, 2014, pp.61-72.	出所・原秩序
9	2019年 ２月２日［土］	山永尚美	Helen Samuels, 'Who Controls the Past,' *The American Archivist*, vol.49, No.2, 1986, pp.109-124.	アプレイザル
10	2019年 ３月16日［土］	―	JSAS2019年度大会報告者・プレ報告会	
○2019年度				
11	2019年 ４月27日［土］	―	2019年度前期サブゼミ相談会 論文の読み方・書き方	
12	2019年 ６月１日［土］	小澤梓	Joshua D. Hager, 'To Like or Not to Like：Understanding and Maximizing the Utility of Archival Outreach on Facebook,' *The American Archivist*, vol.78, No.1, 2015, pp.18-37.	アウトリーチ
13	2019年 ６月15日［土］	亀野彩	橋本陽「概念としてのフォンドの考察－ISAD(G)成立史を踏まえて」、『京都大学大学文書館研究紀要』、第17号、2019年、1-14頁.	編成記述
14	2019年 ７月27日［土］	川田恭子	Expert Group on Archival Description(EGAD), 'Records in Contexts - Conceptual Model(Version 0.1),' International Council on Archives, 2016, pp.1-12.	編成記述
15	2019年 ７月27日［土］	中村友美	Peter Scott, 'The Record Group Concept：A Case for Abandonment,' *The American Archivist*, vol.29, No. 4, 1966, pp.493-504.	編成記述
16	2019年 ８月24日［土］	岡崎彩香	Rachel Walton, 'Looking for Answers：A Usability Study of Online Finding Aid Navigation,' *The American Archivist*, vol.80, No.1, 2017, pp.30-52.	検索手段
17	2019年 ８月24日［土］	清水ふさ子	Adrian Cunningham, 'Harnessing the Power of Provenance in Archival Description：An Australian Perspective on the Development of the Second Edition of ISAAR(CPF),' Jean Dryden eds., *Respect for Authority: Authority Control, Context Control, and Archival Description*, Routledge, 2008, pp.15-31.	編成記述

回数	開催日	担当者	報告テーマ・文献	トピック
18	2019年 ８月24日［土］	大木悠佑	Geoffrey Yeo, 'Continuing Debates about Description,' Heather MacNeil and Terry Eastwood eds., *Currents of Archival thinking, 2nd edition*, Libraries Unlimited, 2017, pp.163-192.	編成記述
19	2019年 ９月21日［土］	平野泉	Mark A. Greene and Dennis Meissner, 'More Product, Less Process：Revamping Traditional Archival Processing,' *The American Archivist*, vol.68, No.2, 2005, pp.208-263.	編成記述
20	2019年 11月４日［月］	橋本陽	Marco Bologna, 'Historical Sedimentation of Archival Materials：Reinterpreting a Foundational Concept in the Italian Archival Tradition,' *Archivaria*, No.83, 2017, pp.35-57.	
21	2019年 11月23日［土］	山永尚美	Michael K. Buckland, 'What is a 'Document'?,' *Journal of the American Society for Information Science*, vol.48, No.9, 1997, pp.804-809.	
22	2020年 １月18日［土］	金甫榮	Caitlin Patterson, 'Perceptions and Understandings of Archives in the Digital Age,' *The American Archivist*, vol.79, No.2, 2016, pp.339-370.	
23	2020年 ２月29日［土］	—	アーカイブズ学理論研究Ⅲ最終レポート報告会	
○2020年度			*COVID-19の影響により、24回から28回まではオンライン開催	
24	2020年 ５月２日［土］	橋本陽	D. Richard Valpy, 'For the Purpose of Accountability：The Need for a Comprehensive Recordkeeping Act,' *Archivaria*, No.88, 2019, pp.198-229.	
25	2020年 ５月31日［日］	金甫榮	Gregory Wiedeman, 'The Historical Hazards of Finding Aids,' *The American Archivist*, vol.82, No.2, 2019, pp.381-420.	
26	2020年 ６月21日［日］	岡崎彩香	Elizabeth Yakel, 'Thinking inside and outside the Boxes：Archival Reference Services at the Turn of the Century,' *Archivaria*, No.49, 2000, pp.140-160.	
27	2020年 ７月19日［日］	大木悠佑	Luciana Duranti, 'The Concept of Appraisal and Archival Theory,' *The American Archivist*, vol.57, No.2, 1994, pp.328-344.	
28	2020年 ８月23日［日］	中村友美	Margaret Procter, 'Protecting rights, asserting professional identity,' *Archives and Records*, vol.38, No.2, 2017, pp.296-309.	

している。参加人数が増えたことで、希望する文献のトピックがより多様になった。そのため2019年の後半からは、上記のようなトピック型と各自希望型を並行させ、参加者が読みたいと思うものがあれば、積極的に取り上げるようにした。

こうした経緯を経て、サブゼミの活動は大きく次の３つに集約されていった。まずトピックに沿った複数の文献を読むこと。次に参加者が希望する文献を単発的に読むこと。最後は参加者の研究報告を通して、他メンバーと意見を交わしたり、研究相談に乗ったりという研究交流である。

文献講読の際は、報告者による30分程度のまとめと、その後２時間程度、疑問点などを議論している。また、自身の研究報告や論文執筆に関する相談の際は、その状況に応じた形式を設定している。

2020年度は、サブゼミもCOVID-19の影響を受け、学内施設の利用に制限がかかり、オ

ンライン開催を余儀なくされている。ところが、オンライン開催に移行したことにより、これまで地理的な要因で参加できなかった修了生等が、北は秋田から南は沖縄まで参加できるようになった。期せずしてそれぞれの現場で学ぶ意欲のある人たちが幅広く参加できる体制となり、COVID-19が終息した後でも活用していきたいと考えている。

3. サブゼミ活動の基本的な考え方

サブゼミ活動の３つの基本的な考え方を紹介しつつ、その意図を提示したい。

●アーカイブズ学の論文執筆にあたり、基本的で重要な文献（理論、考え方）を学ぶ
とくに博士後期課程に在籍する院生を念頭に置いたもので、アーカイブズ学の学問的な理論体系のなかに位置づけた論文が執筆できるよう、そのトピックにおいてよく引用される基本的で重要な文献を精読している。
●継続的に研究、勉強する場となる
本専攻の修了生は、現場で働きながら継続的に研究や勉強を続けたいとする一方で、専門職が少ないこともあり、概して学問的な知識・理論や、問題意識を共有できる人が近くにいないことがある。日々の業務をこなすだけでなく、アーキビストとしての学びを維持するための場所として、サブゼミを活用してもらうことを意図している。修了生の参加は、サブゼミに実務的な視点からの議論の奥行きをもたらすとともに、知識・理論を踏まえた実務へと現場に還元されている。
●論文執筆や研究活動（議論や研究相談）を支援する場となる
論文執筆や研究相談の交流の場として機能することを目指している。本来こうしたことは、院生室（閲覧室）で行なわれるものだが、つねに誰もが院生室にいるわけではないことから、サブゼミという場所と時間を創出し、研究交流を促進させるものとした。

サブゼミでは議論・討論を重視している。議論とは、往々にして一つの解答が出ないものであるため、報告に対しあえて司会などは置かずに、それぞれの関心から質問や気になった点、感想を気がねなく述べることを心がけている。

そして、サブゼミ活動のベースには、参加者それぞれのやりたいことが実践できる、いわば「アーカイブズ学なんでもあり」の考えがある。そのため、参加者からの提案次第で新しい研究企画が実現でき、単なる文献講読や個々の研究相談に留まらない研鑽の場となっている。他の研究会では尻込みしそうな挑戦的な研究報告であっても、仲間内だからこそ、一緒に悩み、有意義なコメントをもらえることもある。「なんでもあり」だからこそ、制限されない考え方を許容し、自由な提案・議論ができる場として、参加者それぞれが抱える課題や研究活動に刺激を与えている。

4. サブゼミ活動がもたらす成果と意義

次に、サブゼミの内容を具体的に紹介し、活動の成果や意義について触れていきたい。

文献講読は、参加者が共有するアーカイブズ学の基礎的な知識をベースに[2]、理論の背景となる枠組みやその変遷、理論から派生した方法論を体系的に理解する機会となっている。「出所・原秩序」に関するトピックでは、Peter HorsmanとTerry Cookの２論文（表中１、２）を基に、Natalis de Wailly、Dutch trio（Muller、Feith、Fruin）、Johannes Papritz、Michel Ducheinら、1840年代以降の展開を踏まえつつ、フォンド概念をめぐる議論を学び、さらに参加者が直面している様々な形式の資料群を取り上げ討論した。また「編成記述」のトピックでは、近年の編成記述について論じられた一連の文献を順次講読していくことで、アーカイブズ記述の国際標準（ISAD（G）[3]、RiC[4]など）といった標準化の動向と考え方を継続的に捉える好機となった。

また、自由で活発な議論は、一人ひとりの視野を広げ思考力を育むとともに、理論・方法論に関する理解を深めることにつながっている。実際に、編成記述で取り上げたRiCの回では、「シリーズなどの記述そのものは、ISAD（G）で書いているものと変わらないが、それぞれがリレーションでつながるモデルということか」、「AtoM[5]がRiC対応ヴァージョンを開発するということだが、ISAD（G）で使っていた記述をそのまま使えるのか」―「使える」といった意見が交わされた。議論は尽きることなく「これから実際にRiCを実装する機関がでてきたら具体的な問題がでてくるのではないか」、「注目はしていきたいが、理解し使いこなすには修練が必要である」などと、アーカイブズ実務の視点も取り入れたやり取りが展開した。

そして、サブゼミを媒介とした研究交流では、修士論文の執筆に取り組む博士前期課程の院生を中心に、サブゼミで研究の進め方や論文執筆の悩みを相談できる場になっている。同様の趣旨で企画された日本アーカイブズ学会のプレ報告会（表中10）では、本番環境を

2――本専攻では、オーストラリアにおいてアーカイブズ学を学ぶ学生のためのマニュアル*Keeping Archives*（Jackie Bettington, Kim Eberhard, Rowena Loo, Clive Smith eds., *Keeping Archives* 3rd ed., The Australian Society of Archivists, 2008.）が基礎文献として講読されている。

3――International Council on Archives（ICA）によって策定されたアーカイブズ記述のための国際標準。1994年にアーカイブズ記述の国際一般標準International Standard for Archival Description（General）（ISAD（G）、2nd2000）、1996年に団体・個人・家のための国際標準アーカイブズ典拠レコードInternational Standard Archival Authority Record for Corporate Bodies, Persons, and Families（ISAAR（CPF）、2nd2004）、2007年に機能の記述に関する国際標準International Standard for Describing Functions（ISDF）、2008年にアーカイブズ所蔵機関の記述に関する国際標準International Standard for Describing Institutions with Archival Holdings（ISDIAH）が公開された。

4――RiC（Records in Contexts）は、ICAによるアーカイブズ記述のための新たな標準で前注の４つの標準を包括した記述標準を意図して、開発が進められている。2016年に概念モデルであるRiC-CM（Records in Contexts Conceptual Model）が公開され、その後RiC-CMで示された概念を表現するオントロジーRiC-O（Records in Contexts Ontology）の開発が続けられている。

5――AtoM：Access to Memory。アーカイブズ記述に対応したオープンソースのソフトウェア。https://www.accesstomemory.org/en/

意識した報告を行なうことで物理的な準備と精神的な備えになり、相互にアドバイスしあうことで客観的な視点が得られ報告のブラッシュアップをはかることができた。そして、授業履修者の自主的な報告会とコラボレーションするなど、新しい試み（表中23）[6]につながり研究交流を促進させている。

サブゼミ参加者からのコメントを以下、紹介する[7]。

> 在学中には理論と実践がうまくつながらなかったが、卒業後アーキビストとして現場にいながら、サブゼミを通じて再度理論を勉強したり、他の人と議論することによって、その理論と実践についてより深く考えるきっかけになった。専門職には、とても大事なプロセスであると感じている。（修了生）

> メンバーは博士後期課程の方が中心となっているので、いつも勉強不足を感じながら参加している。今年度のオンライン形式での開催は大学に所属していない私としては、本当にありがたい。今後もできる限り参加していきたい。（修了生）

> 研究対象ではないが重要な論文を読む契機になっている。また一つの論文を読んで、公文書・研究機関・企業アーカイブズと異なる視点を持つ方々と意見を交換できる場は普段あまりなく、色々な気づきを得られる貴重な機会になっている。（博士前期課程学生）

このように、様々な形での研究交流（コミュニケーション）は、刺激やモチベーション向上といった相乗効果をもたらしていることも、サブゼミの成果として挙げることができる。

5. まとめにかえて

これまで述べてきたように、本サブゼミは学生主体の文献講読から出発し、修了生を巻き込み、研究促進、研究交流の拠点として存在感を増してきた。

文献講読を通して我々が感じていることは、先人達は容易には答えの出ない課題に向かって思索を続け、新しい情報環境が生まれたときにはそれまでの前提を問い直すという作業を絶えず行なってきたということである。そのことはアーキビストとしての我々が目前の課題に立ち向かう際の大きな指針ともなっている。

我々の学びに終わりはない。「アーカイブズ学なんでもあり」を掲げ、さらなる挑戦を

6――アーカイブズ学理論研究III（海外文献研究）の平野泉講師もサブゼミに参加している。2019年度は、授業履修者のうち数名がサブゼミ参加者でもあったことから、年度末の最終レポート報告会にサブゼミが協力し、合同開催することとなった。

7――肩書はサブゼミへの参加開始時のものを掲載。

続けていく。オンライン開催によって地理的な障壁がなくなった今、活動に興味を持った仲間が参加することで、より多様な視点からの活発な議論を行なうこともできるだろう。これからもこの学問領域の発展に貢献するよう、この活動を継続させていきたい。